



## S-KYT 研修を実施して



広島県廿日市市消防団

### 1 はじめに

廿日市市は、昭和63年4月1日佐伯郡廿日市町が市制に移行し、誕生しました。平成15年3月1日に佐伯郡佐伯町及び吉和村を、平成17年11月3日に佐伯郡大野町及び宮島町を合併し、東西約17.6km、南北約23.4km、総面積489.36km<sup>2</sup>で、現在総人口約11万8,000人の廿日市市となっております。

広島県の西部に位置し、東側に広島市、山県郡安芸太田町、西側に大竹市、山口県岩国市、北側は島根県益田市にそれぞれ囲まれています。北側山間部は中国山地の山々が連なり、南側沿岸部は瀬戸内海に面し、日本三景「安芸の宮島」(厳島)には、世界文化遺産「厳島神社」に代表される神社仏閣が多数あり、世界に誇る一大観光地となっております。

本市の基幹産業は木材加工業、漁業、観光業が盛んです。

木材加工業については、西日本有数の木材専門港「木材港」があり、その周辺には木材工業団地が広がっています。

漁業については、瀬戸内海の豊かな恵みを受けた近海漁業が盛んであり、特に牡蠣養殖が盛んで、「地御前かき」、「安芸の一粒」は全国的

なブランドとして知られています。また、あさり養殖も盛んで「大野のあさり」も有名です。

観光業については、厳島には国宝や重要文化財などの歴史的な文化財や、国の天然記念物の「瀨山(みせん)原始林」などを抱え、年間を通じて多彩な行事に彩られており、国内外から年間350万人以上の観光客が訪れる世界的な観光地です。その他沿岸部ではマリンスポーツや釣り、海水浴など、瀬戸内海の特長を生かしたレジャー産業が盛んな一方、北部の山間部では、800m～1,200mの標高を生かした冬のスキー・スノーボードや、夏の高原レジャーが盛んです。



厳島神社と大鳥居



かきの水揚げ

## 2 廿日市市消防団の概要

廿日市市消防団は、合併以前は廿日市市、佐伯郡佐伯町、大野町、宮島町及び吉和村にそれぞれ消防団を組織しておりましたが、合併を経て各市町村の消防団が統合され、現在の廿日市市消防団が誕生しました。現在は、1 団本部、5 分団本部、24 分団、37 部、88 班の条例定数 732 名、実員 639 名(平成 24 年 8 月 1 日現在)で構成され、指揮車 2 台、消防ポンプ自動車 6 台、小型動力ポンプ付積載車 44 台を配備しています。平成 16 年からは女性消防団員の募集を開始し、現在 18 名が活躍しています。

消防団の主な活動としては、災害活動はさることながら、年初めの出初式に始まり、火災予防運動期間中における建物火災合同訓練、林野火災合同訓練、防火パレードや、梅雨入り前に行われる水防訓練などを、年間行事として実施し、さらに自主防災組織で行なわれる訓練の指導、地域行事での事故防止のための警戒なども行っています。

## 3 S - KYT 研修を実施した経緯

本市消防団大野分団では、水防訓練実施後に幹部研修会を毎年開催しています。昨年度は幹部研修会の際、「安全管理セミナー」を消防基金と共催し、安全管理、健康管理の重要性について学ぶことができ、大変有意義でした。本年度

の幹部研修会については、別講座の S - KYT 研修を実施したいとの、団員の意見が多数寄せられたため、開催に至りました。

## 4 S - KYT 研修を実施して

平成 24 年 6 月 3 日(日) 13 時 00 分から、廿日市市大野支所 3 階会議室において、S - KYT 指導員の谷重生氏、井上勝明氏、南屋丞氏の 3 名を講師としてお迎えして、廿日市市消防団長をはじめ、大野分団の指導的立場の団員を含め、総勢 65 名が研修に参加しました。

研修当日は、早朝からの水防訓練終了後ということもあり、参加団員の疲労もピークを迎えていましたが、どの団員も消防職員 OB である講師の、経験を交えた講話に真剣に耳を傾け、「指差し呼称、指差し唱和、タッチ&コール」が始まると、水防訓練の疲れも忘れ、活気あふれる雰囲気の中研修が進められました。

研修最後の危険予知訓練では、普段実施したことのない、イラストシートを用いた、現場活動に潜む危険要因を出し合い、発表するという内容でした。講師も驚かれるような意見も飛び出し、有意義な訓練となりました。

現場活動をはじめ、訓練などにはさまざまな危険要因が潜んでいることを再確認でき、今後の安全管理の重要性や、その手段等を再認識することができました。



団長挨拶



## 5 今後の取り組みについて

東日本大震災以降、地域に対する消防団の取り組みはますます注目されています。消防団の活躍がクローズアップされてきたとともに、津波等により多くの消防団員が犠牲になり、公務災害のリスクが改めて認識されたのもまた事実です。

この度の研修では、考えられる危険要素をよ

り具体的にイメージすることによって、公務災害を未然に防ぐ非常に有意義なものでした。その後の訓練でも、タッチ&コールを行う分団も見受けられ、団員の中で確かに根付いているものであると確信しました。

今後も『ひとりひとり大切な団員』と胸に刻み、公務災害を起こさない消防団活動の実現に向けて、消防団活動に取り組んでいきます。

